〔後奈良院御撰何曾〕もろこしにたのむ社のあればこそまいらぬまでも身をばきよむれ

唐紙せうじ

〔後奈良院御撰何曾之解〕もろこしの社は唐神の意なり、身をきよむるは精進の意なり、精進障子、ともに玄やうじとも、さうじともいへば、合せてからかみさうじと解たるなり、さて此ものは、今からかみとのみいふは略語なり、ふすまといふは、もと衾の名なるを、臥席の間にたつるよりかくもいふなり、からかみ障子とつゞきて一種の名なり、今世にいふ如く、からかみと障子とふたしなにはあらず、今いふ障子は、むかしはあかり障子といへり、たゞ障子といふ時は、すなはち裏表ともに張かさねたる、今のふすまのことなり、間を障へへだつるによりて障子といふなり、子は金子、扇子、鑁子などいふに同じ、

〔和漢三才圖會三十二家飾具〕障子（たゝうじ）

寢間障子（フスマ）俗用衾字非也、衾者寢衣之類、以障子格兩面張塞、不見明、而可以隔寢間及防風、又有鈕鐶（ヒキテカキカケ）而可禦盜、

〔倭訓栞前編二十六〕ふすま　ふすま障子は、襖の字を書り、紙被に似たるよりの名なるべし、唐詩纂要に紙門とも見えたり、

〔松屋筆記八十四〕被障子

今世からかみといふは、被障子の事也、三内口決、殿并家作等事ノ條に、本主殿ノ間ニ有帳臺、南面與公卿座之間被障子二間云々、此被障子からかみの事也、

〔貞丈雜記十四家作〕一ふすま障子と云は、表裏よりはりたるを云、今はから紙といふ人有り、

〔倭訓栞前編六下加〕からかみ　韓紙の義もあり、千載集にからかみのかたぎと物名に見えたり、俗に衾障子を玄かいへり、西土に粉箋と云ふ印紙也といへり、

〔玉勝間十二〕から紙